

秀 賞



希望ある未来をくれた大切な人

岩手県奥州市立水沢中学校

二年 佐々木 隆一郎

「いいね！」
「がんばって！」

僕が、母の部屋で「医者になりたい。」と告げたとき、母の周りにいてお世話をしてくださっている人たちが一斉に手をたたきながら応援してくれました。母も笑顔で僕を見つめていました。

僕の母は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）という病気で、僕が中学一年生のときに亡くなりました。この病気は、どんな手や足が動かせなくなり、発症後三年〜五年で呼吸麻痺や嚥下筋麻痺がおり、死に至るとされてきた病気です。約十万人に一人くらいの確率で発症し、原因や治療法がわかっていない病気と言われています。

僕が母の異変を感じたのは、幼稚園の年長のときでした。僕が家で遊んでいると、玄関で大きな音がしました。急いで音がしたほうを見ると、父と母が肩を組んで落ち込んだ表情をしながら家に入っていました。小さかった僕は、母が転んでしまい、骨折かなにかしたのだと思っていました。しかし、母の様子は一向に治る気配がなく、むしろひどくなっていきました。母を気にしながら、僕は一人で遊ぶようになっていきました。しだいに母は、足だけでなく手も

不自由になっていきました。一人でご飯も食べられなくなる母を見るのがつらくてつらくてたまりませんでした。

母の足が不自由になったのは、僕が小学校の一年生になってからです。どこへ行くにも杖か車いすでの移動。普通の人なら簡単に上げられるちよつとした段差を上げられなくて悔しそうにしている姿を僕は何度も見てきました。

三、四年生になると、杖や車いすでの移動も難しくなり、ベッドに寝たきりになりました。母方の祖母やヘルパーさんが毎日来て、母の介護をしてくださいました。父と僕と妹が三人で出かけるとき、いやな顔ひとつしないでも母は見送ってくれました。そのときの母の気持ちを考えると僕は、なぜか申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

そんな生活を続ける中で僕は、母の体を治したいと思うようになりました。ある日、母の部屋で僕は、「医者になりたい！」と、言っていました。それを聞いて、周りの人は、「いいね」「頑張って！」と声をかけてくれ、何よりも母が、笑顔でほほえんで僕のことを見てくれました。

僕は、母のことを治したいという一心で、小学校の間、一生懸命勉強しました。「医者になりたい。」という僕の決意を聞いてほほえんでくれた母。母を喜ばせることは勉強することなのだと思います。必死でした。

中学校に入ると、母はほとんど話せなくなっていました。母とは五十音が書かれた透明な板やイトークというアプリを使ってしか会話することができなくなりました。それでも一緒に話したり、笑ったりする生活は楽しく、かけがえない時間でした。

そんな日々も長くは続かず、母は、僕が中学一年

の冬、亡くなりました。

母が亡くなった後、父が言いました。

「本当は、お母さん人工呼吸器を付ければまだまだ生きられたんだ。でも、みんなに迷惑になるから、自分は付けたくないって言ったんだよ。」

それを聞いて僕は、「母は最後まで僕たちのことを思ってくれたのだ。」と思いました。でも、僕はもっと母と話したかった。もっと母の笑顔を見たかった。もっと母の思いを知りたかった。後悔ばかりです。母の本当の思いを汲み取るには、僕はあまりに幼かった。それが今となっては、悔しくて、悔しくてたまりません。

それからです。僕はまず、ALS（筋萎縮性側索硬化症）とは、どんな病気なのか、自分で調べました。そして、難病といわれる病気は現在、どういう状況なのか。現在の医療はどのように進歩しているのか、考えたり、調べたりするようになりました。普通の同級生たちはあまり考えない、病気に苦しむ人たちのこと。そして、本人だけでなく、その人を取り巻く家族や周りの人たちの思いについて考えるようになりました。

中学二年になってようやく自分の進路について考えるようになりました。自分の将来を考えるとき、今まで自分が幸せに楽しく暮らしてきたことは、母なしでは考えられません。そう思えば思うほど、母ともっと話したかった。母の思いも聞きたかった。でも、その思いはかなえられません。思い出すのは、僕が「医者になりたい。」と言ったときにほほえんでくれた母の笑顔。あの笑顔に報いるために、僕はもっともっと勉強して、病気に苦しむ人、そしてその周りの人にも力を与えられる人間になりたい。そんな将来の目標に気づかせてくれた母に本当に感謝しています。